

オリンピックでの東京湾での水泳競技について

竹中 幸彦

昨年、アフガニスタンではポリオの発生が 100 件を超え、フィリピン、マレーシアでも 30 年ぶりにポリオが発生し、感染拡大が止まらない状況が続いています。世界保健機関（WHO）はポリオウイルスの国際的な広がりについて「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態」を宣言しています。

数年前までは、ポリオはアフガニスタンなどの紛争地域やアフリカの一部など予防接種の接種率が低く、衛生状態が悪い地域だけでの発生で世界から根絶されるのも間近とされていたのが、地球温暖化による平均気温の上昇や局地的豪雨の影響などで生ワクチン由来のものや野生株のポリオの発生が東南アジアでも広がっています。今年は、東京でオリンピック・パラリンピックが開催される予定でしたが、1 年延期となりました。オリ・パラが開催されれば海外からの多くの人々の日本への訪問により、国内では確認されない感染症も多く持ち込まれる危険性があります。

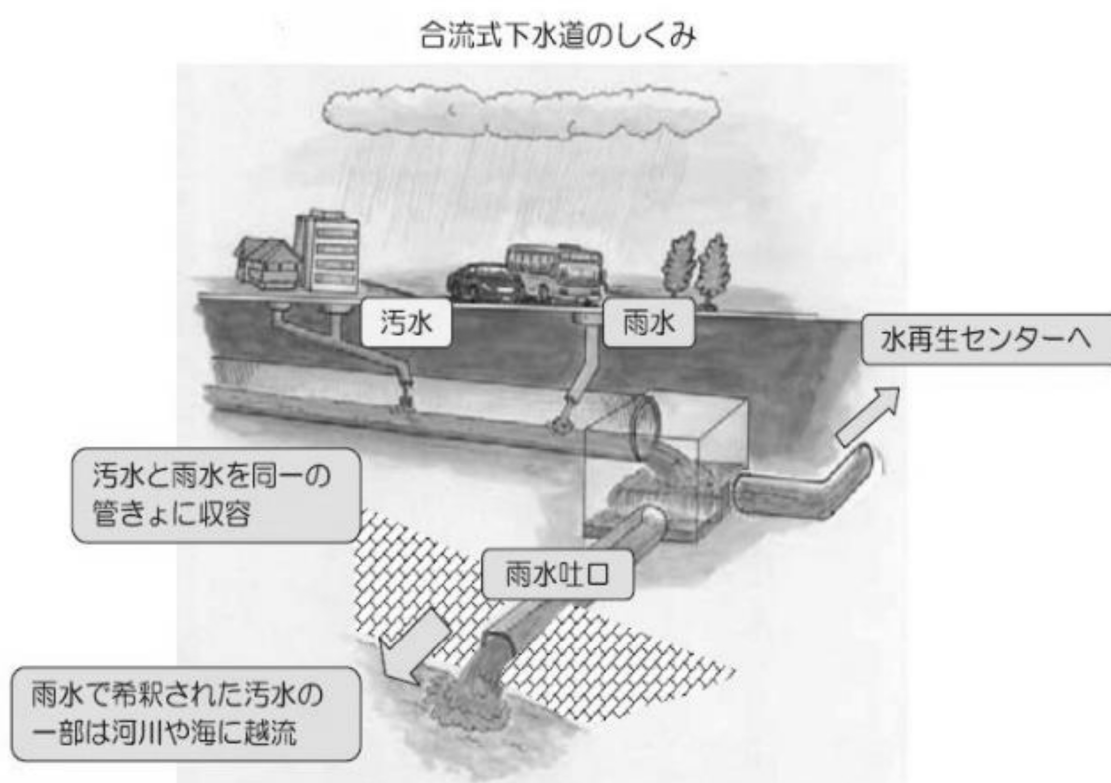
オリンピック競技の中には東京湾を泳ぐ競技があります。トライアスロンはスイム（水泳）1.5 キロメートル・バイク（自転車ロードレース）40 キロメートル・ラン（長距離走）10 キロメートルの、合計 51.5 キロメートルで競われます。

また、水泳（マラソンスイミング）が、男女とも 10 km の距離で競技が行われます。いずれも、お台場海浜公園で行われます。



東京湾を泳ぐことは、感染症のリスクがあります。東京湾周辺の下水道の普及率は非常に高く、特に東京都では 90% 以上の下水が処理場で処理されています。

ところが、これらの下水道は、合流式下水道 82% 分流式下水道 18% の割合です。合流式方式では、路面に降った雨水なども汚水と一緒に下水管に流れ込んでしまうため、大雨が降って下水管に大量の雨水が流れ込み下水水量が増えると末端にある下水処理場が処理し切れなくなって、下水が未処理のまま河川や海域に直接放流されることが起こります。



国立環境研究所の水士圏環境研究領域と東京都環境科学研修所との共同研究によると、秋に台風が通過した後、増水した多摩川や荒川の水や未処理の下水が流入することで、東京湾にどのような影響があるのかを調べた研究発表があります。

下水が処理しきれず直接河川に流れ込んだ後には、糞便性大腸菌は、平水時の 100 ~ 1 万倍くらいまで高くなり、アクアラインの通風口である〈風の塔〉まで分布を拡げているとあります。通常は生下水が処理場で処理され、塩素消

毒されるため糞便性大腸菌は余り検出されないのですが、降雨により下水量が増えて処理場で処理し切れなくなり、そのまま海域に放流されるために多くの大腸菌が検出されたということです。

マラソンスイミングやトライアスロン競技が予定されている時期に局地的豪雨が降る時期です。もし、局地的豪雨などで下水が放流されることがあれば、ポリオを含め感染症の恐れがある未処理の下水が混ざり込んだ海の中を競技者は泳がされることとなります。

オリンピック参加のアスリートは、健康で強健なイメージがあるかもしれませんが、より速く泳ぐため極限まで体重を削ったり、すべてのエネルギーをタイムの短縮に注いでいるため身体は極度に疲労しています。結果、感染症に対する耐性も弱くなっています。海が下水臭かった程度の笑い話ですめば良いが、最悪疲労している体に感染症も心配となります。

札幌で開催しろとは言いませんが、伊豆諸島の 9 島（大島、利島、新島、式根島、神津島、三宅島、御蔵島、八丈島、青ヶ島）、小笠原諸島の 2 島（父島、母島）の計 11 島が東京都の島です。

せっかく海外から来てくれた、アスリートにも美しい安全な海で泳いでもらいたいですし、東京都の美しい自然や海をアピールすることもできるので、島での競技の開催を検討してほしいと思う今日この頃です。

